

【保育実践論文(ソニー幼児教育支援プログラム) 審査講評】
2019年度 最優秀園
国立大学法人 福島大学附属幼稚園

本園は、昨年の「自分で取り組み、自分で考え、自分でやってみる」の実践から「5歳児の推測」を捉え、今年度はさらに踏み込んで「自分で考え、試そうとする子どもを育てる」をテーマとし、動植物に関わる子どもの姿に視点を当てて取り組まれました。その中で、5歳児が、動植物との関わりで生まれた“「分からない」壁”を乗り越えるために思考をフルに働かせ、試行錯誤する行動力をもつには、3歳児、4歳児なりに芽生える「科学する心」が影響すると考え、各年齢の成長過程や発達の特徴を明らかにしています。子どもたちが自然から多様な学びを得る体験として、昨年に引き続きザリガニとの関わりを題材とし、環境や援助の工夫をしたことで、今年度は子どもたちの体験や保育者の子ども理解が深化しています。3歳児では手や尾がないザリガニに気づく場面、4歳児では餌を食べず動かないザリガニに「寝ているのではないか？」と考えた場面、5歳児では水槽のザリガニの死の原因を考え合う場面など、子どもたちは予想ができない展開や、やり直しのきかない事態に直面し、素直に自分の思いと向き合い、納得するまで友達と考え、多様な学びをしています。これら3、4、5歳児のいずれの事例も、保育者の鋭い観察による記録と解釈により、子どもたちに「科学する心」が育まれていることがよくわかります。

特に、5歳児が、消しゴムに魚の匂いをつける実験をし、ザリガニが嗅覚をもとに行動していることを証明したり、大人が気づいても深くは追究することのない“ソラマメの臍(へそ)の緒機能をもつ部分”を、具体的に探究したりしている視座は、たいへん優れたものです。このような、子どもが興味をもつきっかけや問題に直面する場面を見逃さず、子どもに必要な物的環境を設定し、地域の教育力を生かした人的環境の工夫に努めながら、論文主題「科学する心を育てる」に熱心に取り組まれたことが、高く評価されました。

また、一人の子どもに焦点を当てて継続的に記録することで、子どもの体験の深まりだけではなく、思いを実現するための体験の広がりや質の違う多様な体験により、「科学する心」が育まれることも明らかにされました。さらに、子どもの疑問を、保護者も地域の専門家「野口博士」や「畑の先生」とも共有し、“子どもと一緒に考え合う”という連携の工夫は、他の園でも取り入れることができ、たいへん参考になる取り組みと思われます。

今後も、これらの成果を基に、本園が子どもたちに「科学する心」を育む独自性ある実践を積み重ね、さらなる保育の質の向上につながることを願っております。